

氏 名	うちだ つぐ のぶ 内 田 次 信
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	論 文 博 第 458 号
学 位 授 与 の 日 付	平 成 15 年 11 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	呼 び か け る ド ラ マ ア リ ス ト パ ネ ス と ギ リ シ ア 劇

論文調査委員 (主 査) 教 授 中 務 哲 郎 教 授 高 橋 宏 幸 教 授 内 山 勝 利

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、アリストパネスの『アカルナイの人々』『平和』『女の平和』『蛙』の4作を、アイスキュロスおよびエウリピデスの悲劇と比較することにより、悲劇と喜劇を超えた「呼びかけるドラマ」の作家アリストパネスという新解釈を提示する試みである。喜劇では、その始源から観客への語りかけが一大要素になっていたが、アリストパネスは卑俗低劣とされた喜劇の革新を目指すにとどまらず、ライヴアル的ジャンルたる悲劇の特性を批判的に取り込みながら、観客に働きかける新しい演劇様式を打ち立てようとした、というのが本論文の主張である。

序章は全体の主意を記す。論者は喜劇と悲劇の起源に関するアリストテレスの説に基本的に従いながら、陽根の祭儀を一大特徴とする酒神に連なる両演劇が、淵源の点からは「双子」であることを確認する。しかしその後の発展において、一方は国家的援助を享受して権威化されたのに対し、他方は軽視されて公的な競演を許されるのも遅れた。そういう一種の差別を喜劇作家たちは嘆き憤るが、他方では悲劇のパロディーを行いながらその成果をいわば盗み取るたくましさも持つ。しかもそのように悲劇から劇要素を取り込みながら、他方では、祭礼行列における悪口のしきたりを受け継いで、この「尊厳」なる劇をメタ演劇的視座から批評する。それは、市民にとって喜劇が悲劇と同じくらい有益であることを明らかにしたいという悲願の発露でもある。アリストパネスの批評の対象になる悲劇作家は、特にアイスキュロスとエウリピデスである。この二人が、市民の教育者としての自覚を基本的に共有していたことは認められる。しかし、前者の作風は「教示する劇」と、後者のそれは「問いかける劇」と提示されるが、「問いかける劇」は結果的に卑小な自己中心主義をもたらし、一方、アイスキュロス劇も時代遅れの側面を持つことが示唆される。

アリストパネスの喜劇はまた、悲劇のみならず喜劇についても論じる。『騎士』では、先輩作家マグネス、クラティノス、クラテスの作風を論評しつつ、諷刺劇の旗手クラティノスの道を選ぶことを『騎士』の内容そのものによって明らかにする。しかしアリストパネス劇は、市民的ヒーローを中心人物にすることで、クラティノスにはなかった新機軸を出すばかりでなく、観客への直接的呼びかけという喜劇古来の長所を生かしつつ、さらにエウリピデスとアイスキュロスの悲劇の特質を統合して取り込もうとする。ただし、エウリピデス劇は「問いかけ」を通じて観客・市民に思索や内省を促すが、それは結果的に懐疑的・逡巡的な、また個人主義的・自己中心的な風潮を市民の間に広めることになっている。その点アイスキュロスの作風は、戦時下の困難な状況に置かれた祖国を救いうる英雄の意志や決断を促す可能性はあるが、ただその「教示」的・高踏的演劇は今ではそのままでは受け入れられがたい。市民は教導されるより、自ら意欲し考え行動しなければならないのだ、とアリストパネスは批判する。こうしてアリストパネス自身は、英雄の行動力を持つ市民的ヒーローを登場させ、市民の代表として迷い、苦悩し、決断させる。それは、豊穡なる生命力の実現に他ならない喜劇に、悲劇の特質を意識的・批判的に取り込むことによって、観客・市民への新しい働きかけを創造しようとする、アリストパネスの野心的な試みであった。

第一章は『アカルナイの人々』をエウリピデス『テレボス』と比較しつつ論ずる。『テレボス』の主人公テレボスは、アジアのミュシア地方の王であるが元はといえばギリシア人である。しかもこの英雄は正体を隠して乞食の姿を採る。英雄の

アイデンティティのこのような二重の多義性と相俟って、この作品では、愛国心とは何か、正義や精神の高貴さとは何かといった問いかけが答えのないまま投げかけられる。一方『アカルナイの人々』では、アリストパネスは『テレボス』のパロディーを行いエウリピデスを「飲み込み」ながら、乞食姿の主人公ディカイオポリスに英雄的活躍を行わせる。彼は陽根崇拜の祝祭性と溢れる生活感覚を武器にコロス（民衆）を説得し、行動へと呼びかけるのである。

第二章は『平和』を扱う。そのパロディーの対象となったエウリピデス『ベレロポンテス』では、主人公ベレロポンテスは不条理な摂理について神々に問いかけるべく天に昇ろうとするが、劇は英雄の墜落とともに答を与えられぬまま終わる。一方『平和』では、主人公の英雄的農民トリュガイオスはベレロポンテスを真似て糞虫に乗って天上に至り、コロス（主に農民）と共に「平和」の女神を地下洞窟から救い出そうとして、コロスに励ましと促しを与える。コロスの中にも抵抗する異分子もいれば迷いや不定見を生じるものの、最後には農民の団結によって女神が外に引き出される。『平和』のパラバシスでは、いくつかの点で主人公に重ね合わせられる作者の高揚した自己称賛が行なわれる。パラバシス第一部では他の喜劇作家とは違う自分を誇るが、その第二部では自らを悲劇作家と対比し、国への貢献という点も含めた包括的な意味における劇作家としての自分の価値を観客に訴えかける。

第三章は、アイスキュロス『テバイを攻める七将』およびエウリピデス『ポイニッサイ』を比較材料にして『女の平和』を論ずる。二つの悲劇では、エテオクレスとポリュネイケスの兄弟争いとその相討ちの伝説が扱われ、そして同国人の女性（コロス）または母親が、この戦闘から手を引くよう二人に説くが失敗に終わる。一方アリストパネスの劇では、元来「親族同士のような」アテナイとスパルタの抗争を、同国人または「親族」的な女性が諫めて宥和させることに成功する。アイスキュロスの悲劇では、エテオクレスの立場と決意を理解しないコロスの態度と対比される形で、決闘と死に向かう彼の行為の英雄性が嘆賞とともに描かれるが、運命的な戦いの連鎖は断ち切りがたい。エウリピデスの劇では、ドラマトゥルギー的に母の説得行為に焦点が当てられ、ロゴス（言葉、理性）の力に期待されるが、結局は理によってはことは成らず、ロゴスそのものにまつわる問題も照らしだされて、その非力とむなしさが強調される。他方『女の平和』の作者は、生の喜びを肯定し、理屈よりも現実生活に密着した説得を行い、英雄的意志をもってすれば、戦争終結への道も開けると主張するのである。

第四章は、『蛙』をエウリピデス『バツカイ』とアイスキュロス『エウメニデス』と比較しつつ論じる。『バツカイ』に現われるディオニュソスは両性具有的な外観をもち、「問いかける」神として、通念的な性区別に基づく男性支配構造を、あるいは女性的なアジア対ギリシアという民族差別的優越意識を突き崩そうとする。またバツコスに取り憑かれた女達の神との一体感は他の人々には受け入れられないが、信じようとしなかったカドモス一家は破滅に見舞われる。ディオニュソスが守護する演劇に関しても、神と人との関係あるいは神の恩寵は両義的であり、見る（観劇する）行為は客観的立場からの明察や喜びをもたらす一方、観客・市民自身がディオニュソスの靈感ないし狂気に取り憑かれた演劇者になることもあり、さらには女性的として卑しまれた悲嘆などの激情にしばしば我が身を委ねてしまう。それは神の恩寵なのか、神霊のたぶらかしなのか、それとも何なのか、という懷疑と問いかけがここにはある。

他方『蛙』では、ディオニュソスは神というより演劇に関わる人間であり、アテナイに大作家がいなくなってしまった状況を悲しんでいる。主人公は黄泉において、エウリピデスとアイスキュロスの「悲劇の座」をめぐる争いの審判役を委ねられるが、演劇は都市国家の生命力の表れであるから、その役が務まるかどうかということはアテナイ市民としての資質が問われているわけである。ディオニュソスはアイスキュロスとエウリピデスが相手をけなし、自作を誇りつつ、引用し朗読し歌うのを聴きながら、観客・市民の代表として正しい詩人の選択に至る学びを重ね、決断する。結局彼は、危機的状況にある祖国の救済のためには、ソフィスト的詩人エウリピデスの言語遊戯的「軽さ」よりも、思慮深くまた果敢な行動原理の人アイスキュロスの「重さ」の方がより必要であると判断する。しかし、ここに描かれた知性的技術的観点においても申し分のないアイスキュロスは、アリストパネスが変容を加えたアイスキュロスである。そのイメージは、劇作家の務めたる技と論しを実現する理想型の提示として、アリストパネス自身の創作を称揚するものとなっている。

論文審査の結果の要旨

ギリシア喜劇は前5世紀から200年足らずの間に千をもって数えられる作品が作られたが、今日まで完全な形で伝えられ

るものは、古喜劇と呼ばれるアリストパネスの11篇と新喜劇に属するメナンドロスの1作のみである。この中アリストパネスの喜劇は、晩年の作品を除いては作風としてローマ喜劇やルネッサンス演劇に繋がらないばかりでなく、濃密な時事性、難解な言葉遊び、奔放な奇想などの故に、研究は容易でない。本論文はアリストパネスの11作の中、明確な政治的主張をもつもの、パロディの対象となった悲劇作品が特定できるもの、市民ヒーローを登場させるもの、として4作品を取り出し、その創作意図を解明しようとした、日本語で書かれた最初のアリストパネス作家論である。

悲劇と喜劇は共にディオニュソス崇拝に関わる祭事に根源を持ち、いわば双子の姉妹であるにもかかわらず、喜劇のみが不当に冷遇されていた。アリストパネスはそのような喜劇の改革者、いやそれ以上のものとして現れた、とするのが論者の主張である。論者はアリストパネス作品と、パロディの対象とされたアイスキュロスおよびエウリピデスの作品を克明に比較する。そこから明らかになるのは、哲学的に問いかけ答のないままに終わるエウリピデスと、鼓舞し教示するアイスキュロスの姿勢であるが、エウリピデスの問いかけは市民を知的穿鑿、個人の問題、懷疑主義に閉じこもらせるばかりであり、アイスキュロスの教示も今やソフィスティケートされた市民には通用しない。そこでアリストパネスは、教示する劇でも問いかける劇でもない第三の立場、市民の生の本能に訴える「呼びかけるドラマ」を創造しようとした、と論者は説く。アリストパネスのライバルは先輩喜劇作家などではなく、世の尊敬を集める悲劇作家であった、とする視点は文学史の書き換えを迫る斬新かつ大胆なもので、本論文の価値はこの視点の提示にこそあると言えよう。

第一章『『アカルナイの人々』—エウリピデス『テレボス』と比較しながら』。『テレボス』は失われて断片しか残らないが、およその内容は推測できる。ギリシア人ながら小アジアはミュシアの王となっているテレボスは、侵入するギリシア軍を撃退するが、自らもアキレウスの槍に深手を負わされる。神託によると、その傷は傷つけた当人アキレウスにしか癒せないという。テレボスは乞食姿に身を糞してギリシア軍の陣に潜入するが、正体を見破られる。しかし、ギリシア軍はテレボスの導きなくしてはトロイアに到達できぬという神託も明かされて、テレボスはアキレウスに癒され、ギリシア軍をトロイアへと導き行く。この劇は、祖国とは、自己のアイデンティティとは、戦争の正義とは、といった答のない問いかけに満ちていたと思われる。それに対してアリストパネスの『アカルナイの人々』は、『テレボス』を下敷きにしながら、意志と行動のヒーローを創り出す。ヒーローの農民はアテナイとスパルタの交戦中に、ただ一人で敵国と和平を結び、個人貿易の利益をあげるが、アリストパネスはこの作において、利己主義でもよい、戦争反対のために行動すべきことを市民達に呼びかけている、と論者は説く。

第二章『『平和』—エウリピデス『ベレロポンテス』と比較しながら』。ベレロポンテスは天馬ペガソスに乗って天に昇ろうとし、ゼウスの雷に撃ち落とされた英雄であり、アリストパネス『平和』の主人公は、それを真似して糞虫に跨って天に昇り、「平和の女神」を獲得するのに成功する。神話上のベレロポンテスは数々の武勲に傲り、ヒュブリス（思い上がり）故に天の高みを目指したが、エウリピデス悲劇におけるベレロポンテスは、人間の世に満ちる不条理の訳を問いたすために神々に会いに行ったのではないかと論者は推測する。天に昇るための異形の乗物、という二つの作品に共通する趣向を手がかりにして、エウリピデスの哲学的に問いかける劇をアリストパネスが換骨奪胎し、生命力に満ちた劇を創造した、とする論者の指摘は卓抜である。

第三章『『女の平和』—アイスキュロス『テバイを攻める七将』およびエウリピデス『ボイニッサイ』と比較しながら』。ここで扱われる三作品は、肉親間の破滅に至る争いを親しい女性が諫止しようとする、という筋で共通する。アイスキュロスとエウリピデスの作品において女性が説得に失敗するのは、正義、平等、愛国心、勇気等の言葉の価値が相対化し、あるいは逆転して、アテナイ人が誇りとしてきた知性の営み、ロゴスを戦わせて事を決するということが不可能になっている時勢を反映しているからである。それに対して『女の平和』では、陽根や葡萄酒^{パッロス}に象徴される生の喜びを肯定し、生活に密着しつつ英雄的行動力をも兼ね備えたヒロインが、セックス・ストライキという喜劇のファンタジーの力を借りて、はじめて平和を達成できた、と論者は説く。平和は喜劇によってしか達成できない、という結論は、アリストパネスに対する論者の称賛であると同時に、所詮それはファンタジーの中でしか達成されないという悲しみにもなっている。

第四章『『蛙』—エウリピデス『バックイ』およびアイスキュロス『エウメニデス』と比較しながら』。この章は分量としては本論文の半分近くを占め、充実した『バックイ』論、『蛙』論を展開すると共に、論者のアリストパネス観の総まとめともなっている。酒と解放の神、そして演劇を司る神ディオニュソスが、テバイの人々を狂気と混乱と破滅に陥れて終わ

る『バツカイ』は、国の秩序、男女の性差、アジアとギリシアといった諸関係について観衆に思索を促すばかりでなく、演劇そのものの存在意義にも疑いを投げかけている。それに対してアリストパネスは、『蛙』の中でアイスキュロスとエウリピデスを戦わせ、両者の文学的特質を吟味批判した後、アリストパネスによって理想化されたアイスキュロスを地上に蘇らせることにより、演劇の再興を目指した、と論者は説く。

アイスキュロスの教示とエウリピデスの技巧を統合し、戦時下アテナイの市民に行動へと呼びかけるドラマを創造しようとしたアリストパネス、という論者のアリストパネス像は本論によって説得的に提示された。ただし、論者も自覚しているように、政治的側面はアリストパネス喜劇の一面に過ぎない。その芸術面、娯楽面、言語面、等々をも含み、全作品を扱う論者によるアリストパネス論が待望される。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2003年10月2日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。